

博士論文審査要旨

論文審査担当者

主査	明星大学教授	島田	博祐
委員	明星大学教授	廣嶋	龍太郎
委員	明星大学教授	石田	健太郎
委員	東都大学准教授	河辺	信秀

申請者氏名 山崎 尚樹

論文題目 理学療法士養成施設におけるコンピテンシー基盤型教育の導入ーコンピテンシーの設定から評価方法の試案とフィードバック方法の開発と運用についてー

（論文審査の結果の内容）

1. 論文構成

本研究は理学療法士養成施設においてコンピテンシー基盤型教育を導入し、その実用性・有用性を検証した内容であり、6章構成となっている。

第1章「理学療法学教育の現状と課題」では理学療法学教育における課題として、「理学療法士作業療法士養成施設指定規則の改正」とそれに伴う「理学療法学教育モデル・コア・カリキュラム改定」の必要性を論じた。続く第2章「理学療法学教育とコンピテンシー基盤型教育」では、第1章で指摘された課題解決には、教育方略としてコンピテンシー基盤型教育が有効と思われること、導入にあたり①コンピテンシーの設定、②コンピテンシー習得度の評価方法の確立、③コンピテンシーの修得に対するフィードバックの実施が必要なことを示した。第3章「本研究の目的と先行研究」では第1～2章の知見をもとに研究目的を明示し、第4章以下の実証的研究につなげた。具体的には理学療法養成施設の学生を対象とした①コンピテンシーの設定、②コンピテンシー評価尺度の試案、③コンピテンシー評価尺度の運用と修得状況の経時的変化の確認、④コンピテンシー修得に対するフィードバック方法の開発等である。

第4章「理学療法士養成施設における基盤型教育の導入」では、理学療法士養成施設学生のコンピテンシー項目に関し7カテゴリー57項目を抽出し、それをもとにコンピテンシー評価尺度の試案作成を行い、信頼性と妥当性を検証した。第5章「理学療法士養成施設におけるコンピテンシー基盤型教育とカリキュラム運営」では、コンピテンシー評価尺度

と客観的臨床能力試験との関係、コンピテンシー評価尺度の実習体験前後の比較、同尺度の評価実習及び総合臨床実習にわたる変動等に関する分析を行うとともに、学生向けのコンピテンシー修得状況フィードバックシートを考案実施し、学習への影響を確かめるなど、コンピテンシー基盤型教育を実際の養成施設カリキュラム運営に適用する試みを行った。第6章「総合考察」では、前章までで得られた知見を基に本研究の意義に関し整理するとともに、学習とコンピテンシー評価との関連についての検証も追加して行った。

2. 内容の評価

本研究の意義及びストロングポイントは（1）理学療法分野では未開拓であったコンピテンシー基盤型教育に係わるコンピテンシーの要素を抽出し、それらを基盤にしてコンピテンシーの評価尺度（試案）を開発したこと、（2）客観的臨床能力試験とコンピテンシーの関係を検証し、カリキュラムモデルに反映したこと、（3）コンピテンシー基盤型教育を実践するためのツールとして、学生向けのフィードバックシートを作成し、コンピテンシー修得状況のフィードバック方法を開発したこと、（4）以上の知見を踏まえて、コンピテンシー基盤型教育を理学療法士養成施設のカリキュラムに導入し、新たなカリキュラムモデルとして提起したことなどである。

一方、本研究のウィークポイントとしては、（1）検証の対象である導入施設・対象が一養成施設に限られたことで汎用性の検討が十分ではないこと、（2）評価尺度の依存的妥当性が未検証な点があるため試案の域を超えないこと、（3）「人生100年時代の社会人基礎力」が考慮されていないこと、（4）コンピテンシー修得の学習方略に対する検討が若干不十分な点があることなどである。

（試験および試問の結果の要旨）

口頭試問での主査・副査からの質問に対し、学位申請者は適切に対応した。「2. 内容の評価」で指摘したウィークポイントは、研究を進める過程で新たに出てきた今後の課題と言うべきものであり、本論文の内容自体の価値を損なうものではないと考える。それ以上に「理学療法学教育モデル・コア・カリキュラム改定」が課題とされる中、先駆的にコンピテンシー基盤型教育を導入したカリキュラムモデルを構築し、教育実践の中でその効果を検証した本研究の独創性と社会的意義は、ウィークポイントを遥かに凌駕するものであり、高く評価されるべきと考える。

上記の点を踏まえ、博士論文審査委員会において本論文が博士（教育学）の学位を授与する価値があるかについて慎重に審査した結果、合格と判定し、本研究は博士（教育学）の学位を授与するに十分価値あるものと認める。